九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

李先胤著『21世紀に安部公房を読む ： 水の暴力性と流動する世界』

大場, 健司
朝鮮大学校外国語学部日本語科 ： 助教授

https://doi.org/10.15017/2320101

出版情報：九大日文. 32, pp.64-66, 2018-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

◎書評

李先胤著『21世紀に安部公房を読む――水の暴力性と流動する世界』

大場健司（おばけんじ）

日本近現代文学とカタストロフ（catastrophe）。第二次世界大戦（World War II, 1939-1945）後の荒廃を描いた荒地派から、阪神・淡路大震災（一九九五年一月一七日）を受けて書かれた、村上春樹（一九四九年―）の『神の子どもたちはみな踊る』（新潮社、二〇〇〇年二月）に至るまで、カタストロフは日本近現代文学における物語の源泉になってきたと言ってもよい。一九八〇年代における冷戦（Cold War, 1945-1989）と核戦争の危機をコンテクスト（context）にして、安部公房（一九二四―一九九三年）もまた核シェルターを描いた『方舟さくら丸』（新潮社、一九八四年一一月）を発表している。東日本大震災（二〇一一年三月一一日）とその洪水という現代のカタストロフを受け、安部公房文学における「水」の表象（representation）を論じたのが、この書評で紹介する李先胤『21世紀に安部公房を読む――水の暴力性と流動する世界』（勉誠出版、二〇一六年七月）である。帯に「大洪水という圧倒的な水の暴力性を目の当たりにしたいま、あらためて安部公房の文学を読み直す」とある本書は、作品が書かれた同時代のコンテクストからのみならず、カタストロフを経た現代のコンテクストから安部を読み直す試みにもなっているだろう。

著者の李先胤氏は東京大学大学院総合文化研究科で博士号を取得され、高麗大学校 GLOBAL 日本研究院ＨＫ研究教授を経て、現在は弘益大学校で教えていらっしゃる。また、跨境 日本語文学・文化研究会、金孝順編『東アジアの日本語文学と文化翻訳、翻訳文化』（과경 일본어문학・문화연구회『동아시아의 일본어 문학과 문화의 번역, 번역의 문화』역락, 2018.2）に、拙稿「越境する『砂の女』――安部公房、ポール・ボウルズ、Ｔ・Ｓ・エリオット――」（「경계를 넘는 〈모래 여자〉――아베 고보(安部公房), 폴 보울즈, T·S·엘리옷――」）が収録された際には、李氏に韓国語訳をして頂いた。ここで記して感謝申し上げたい。

次に、本書『21世紀に安部公房を読む』の内容を紹介したい。「序」では、安部の創作活動が一〇年間のスパンで整理されている。安部の『壁』（月曜書房、一九五一年五月）に関しては、壁への変身における「異形の身体」、及び洪水における「水の表象」が論じられ、そこに「創造と破壊」を同時に行う「〈デモーニッシュ〉なもの」が見いだされている（八頁）。この「〈デモーニッシュ〉なもの」の「怪物性」こそが、安部が一九五〇年代、一九六〇年代に科学技術やＳＦを主題化した際に描いていたものだと言ってもよい。第一節では、安部が「夜の会」や「世紀の会」といった前衛芸術運動に参加していた一九四〇年代後半に、「実存哲学的語彙を駆使していた安部のテクストは、身体の変形という非現実的事件を扱う反リアリズムの文体を獲

得する」(六頁)とあるが、それ以降の安部に実存主義(existentialism)の影響が如何にあったのかが気になる。私見を述べるならば、安部が「〈デモーニッシュ〉なもの」を「名づけがたきもの」(一四頁)と規定するとき、そこには何者でもない「実存」(existence)が見いだされるのではあるまいか。

第一章「〈怪物性〉という概念と安部公房の文学論」では、既存の秩序を揺るがす〈怪物性〉が、安部のSF論やロシア・フォルマリズム(Russian formalism)における「異化」(Defamiliarization)を参照して論じられている。安部のSF論で興味深いのは、「科学」が「非日常」と二項対立的な関係にあるのではなく、むしろ「日常」の内部の「非日常」を開示するものとして提示されていることである。すなわち、安部はSFという「仮説の文学」をとおして、「日常」の価値観を転覆しようとしたのだという。

第二章「水の表象と暴力」では、安部による「水の表象」が作品ごとに論じられている。特に参考になったのが、「洪水」(『人間』一九五〇年一二月号)、及び『方舟さくら丸』(新潮社、一九八四年一一月)に関する箇所であった。第二節では、安部の「洪水」がジュール・シュペルヴィエル(Jules Supervielle, 1884-1960)の「ノアの方舟」("L'Arche de Noé", 1938)と詳細に比較されており、比較文学的に重要である。更に『方舟さくら丸』に関しては、新興宗教「イエスの方舟」や、ガルシア=マルケス(García Márquez, 1927-2014)原作、寺山修司(一九三五―一九八三年)監督の映画『さらば箱舟』(ATG、一九八四年九月公開)との関係で論じられており、安部と寺山の関係を考察する上では必読となるだろう。

第三章「裁きと排除の空間」では、『方舟さくら丸』や『東欧を行く――ハンガリア問題の背景』(大日本雄弁会講談社、一九五七年二月)における「国家」の問題が扱われることで、安部によるナショナリズム(nationalism)批判が論じられていると言ってもよい。すなわち、安部は一九五〇年代から、国家主義や民族主義が「境界を定めることにより生じる限定と排除の暴力」(二〇六頁)を批判していたのだ。このような安部の一貫したナショナリズム批判を提示している点で、本書は同時期に出版された坂堅太『安部公房と「日本」――植民地/占領経験とナショナリズム』(和泉書院、二〇一六年九月)におけるナショナリズム論と好対照を成すであろう。

第四章「「水」と「変形」をめぐる科学的言説の射程」で特に興味深いのは、安部が一九八〇年代に用いた「ヘテロ」(hetero)/「ホモ」(homo)という言葉が、同時代の浅田彰(一九五七年―)の『構造と力――記号論を越えて』(勁草書房、一九八三年九月)における「スキゾ」(schizo)/「パラノ」(parano)に由来することを示した点であろう。安部は国家への集団化(ホモ)に対抗して「ヘテロ」という言葉を用いており、安部はナショナリズムに抵抗するためにポストモダン(postmodern)を受容していたのだ。このことは、これまで消費社会論的に論じられてきた日本のポストモダンを再考する鍵となりうるだろう。

このように、本書は「非現実的な世界を描いたと思われる小説が、きわめて同時代の問題と結びついている点を明らかにした」(波潟剛「李先胤著『21世紀に安部公房を読む 水の暴力性と流動する

世界』（『昭和文学研究』第七五集、二〇一七年九月）一六一頁）点で評価できる。更に、ジョルジョ・アガンベン（Giorgio Agamben, 1942-）やミシェル・フーコー（Michel Foucault, 1926-1984）らの現代思想を積極的に用いていることも特徴的だと言ってもよい。

また、安部の文学を震災を経て読むことで、如何なる可能性の中心を見いだし得るだろうか。かつて番場寛は、震災後の坂口恭平（一九七八年―）のモバイルハウスから安部の『箱男』（新潮社、一九七三年三月）を想起したが（番場寛「「所有」について(2)――坂口恭平『独立国家のつくりかた』を読んで『箱男』を思い出す――」（『もぐら通信』第九号、二〇一三年五月）四―六頁）、『箱男』の都市型狩猟採集生活に政治的オルタナティヴが見いだされ得るだろう。

以上のように、本書は安部の文学における「水の表象」や「怪物性」だけでなく、ＳＦやナショナリズム、ポストモダンを考察する上でも多大なヒントを与えてくれる良書である。勉誠出版にはこれからも、東アジアの研究者による良質な研究書を出版していってほしい。

○目次

はじめに

序章　「安部公房の思想と時代」

1「〈デモーニッシュ〉なものの胎動」／2「批判精神と科学技術への注目」／3「文学ゲリラの戦術と雑種文化論」／4「再構成されるテクストと儀式化に対する抵抗」／5「方舟から「ヘテロ精神」の復権へ」／6「水の表象で世界を考える」

第一章「〈怪物性〉という概念と安部公房の文学論」

1「覚醒を呼びかける〈怪物性〉」／2「〈怪物性〉の文学と認識的異化作用」／3「安部公房における「仮説の文学」」／4「安部公房と日本のＳＦ――「名のない怪物」のゲリラ戦」

第二章「水の表象と暴力」

1「水のスペクトラム」／2「洪水とノアの方舟の反転」／3「方舟という空間と政治」

第三章「裁きと排除の空間」

1「閉鎖空間と排除のシステム――壁というシステムの両義性」／2「方舟という閉鎖空間の政治性」／3「新しい法による国境と排除の論理」

第四章「「水」と「変形」をめぐる科学的言説の射程」

1「「洪水」と観察の科学」／2「水の位相空間と変形の論理」／3「洪水の予言とテクノクラシー」／4「父なるもの／母なるものの〈怪物的〉身体」／5「身近なものから来る異質感――境界線上の身体と生と視覚の問題」

結語「水の波動、転換期を渡る方舟――科学の言説による詩学」

参考文献

あとがき――「計算機の手」で「怪獣の心」を描くこと

（二〇一六年七月　勉誠出版　三〇八頁　四二〇〇円＋税）

（韓国・朝鮮大学校外国語学部日本語科助教授）